

6章 死の海の謎

(1)

竹崎七海への疑心は予想以上に重く雅人にのしかかった。

割烹料理店ではかなりアルコールが入っていたため、そのリアリティも多少はぼやけていたが、翌日の朝になると、冷たい不信感となって意識にへばりついていった。

その感触から逃れようと雅人は意識を仕事に集中した。

しかし部屋や電車などで一人になるとき、七海への疑惑は彼女の足もとにポツカリあいた陥穽となって、雅人の心に抗えないジレンマを巻き起こす。

その七海から、金曜日の夜になって連絡が入った。雅人は思慕と不信のジレンマに喘ぎながら電話に出た。

——大前さん、あれから、わかったことありました？

「いや、特別には……」

平然を装ったが、なにかにすがりたい心境だった。この連絡も、あんなことを知らなければ女神からのラブコールになったかもしれない。

『そうですか』と小声でつぶやいた七海は、

——もうひとつの可能性……以前、大前さんがおっしゃっていた琵琶湖のことですけど、そちらのほうはどうでしょうか？

「行ってみようとは思っていますけど、このところ仕事が忙しくて土日も出勤の予定なんです……」

——でしたら、大前さんの仕事が一段落したころ、声をかけてくださいね。

そのあと七海は急に声のトーンを下げ、

——それと……きのう姉が戻りました。札幌でお世話になったお二人にお礼がしたいと申していました。

「戻られたんですか。お姉さんはもう大丈夫なんですか？」

——はい、おかげさまで。

「それじゃあ、あと気がかりなのは、例の誘拐事件ですね。道警はお姉さんになんといっているんですか？」

——それは……第三者には極秘事項ということで、姉は私にも話してくれません。

七海の口調には、なんの屈託も読み取れない。むしろ、話すごとに彼女との心の距離が縮まっていくような温みさえ感じられる。

「そうですか。たとえ姉妹でも、そのあたりははっきり区別しているんですね」

七海は『ええ……』と力なく肯定し、

——私の姉は、世間一般の姉というイメージじゃないんです。

「あれだけの企業の社長ですから、しかたありませんよ」

——社長というだけではなくて、なんていうか……妹の私にもわからない部分が多いんです。それに、十歳以上離れているせいか、姉というより保護者といった感覚で、仕事のこ
と以外はあまりコミュニケーションもないんです。

《もしかしたら、七海はなにも知らないのかもしれない》

話していると、疑惑の陥穽は次第にぼやけ、清廉な七海の姿が色を濃くしていく。

「お二人は、もつと親密だと思っていました」
すると七海は、ふいに明るい口調に変わり、

——姉も私も自立した大人ですから、それぞれの生きかたがありますわ。

「ははは、おっしゃるとおりですね。いつまでも子どもの姉妹じゃないですよね」

雅人は不審の残渣を苦笑いと一緒に吐き出した。

——あら、私ってそんなに子供に見えました？

七海の声にも笑みが混じる。

「いやあ竹崎さんはオレなんかよりずっと大人ですよ」

——そんなことありませんわ。部屋で一人のときなんか、落ち込んで泣きたくなることだつてあるんですから。

「へえ、そりゃあ意外だな」

——ゆうべだつて……欲しかったワインが手に入ったものですから、それを一人で飲んでいたら、来年はもう三十路みそじになっちゃうんだなって、ブルーな気分きぶんに落ち込んで……。

「さめざめと泣いたつてわけですか？」

——やだ、それくらいじゃ泣きませんよ。でも、泣く代りに1本あけちゃいました。

「極上のワインでヤケ酒つてわけですか？」

——おいしいヤケ酒、でしたわよ……。

その語尾は、扇情的な余韻を含んでいた。

「ヤケで飲んでもうまいワインなんて羨ましいなあ」

——あら、同じワインがまだ2本ありますけど、お飲みになります？

「いいですねえ」

——大前さん、明日からの週末、お忙しいんですよね？

とつさに、電話へ出たときの不信感でいつてしまった『土日も出勤』のひとつが、苦い後悔をまとつて脳裏をよぎる。

「え？ ええ……さつきもいきましたけど……仕事が佳境に入つてまして……」

いいながら、必死に打開策を探し、

「でも平日よりは、早めに切り上げようとは思ってますけど……」

見えずいた弁解だったが、七海はそれを待っていたかのように、

——でしたら明日の帰りにでも私の部屋へお寄りになりませんか？ ワインを飲むぐらいの時間じかんだったら、それほど仕事の邪魔にもならないでしょう？

「い、いいんですか？ そりゃあ感激だなあ」

——あら、この前も同じセリフをおっしゃいましたわよ。それじゃあ、私も同じセリフでお返しますわ。

七海はわざとらしく口調を整え、

——大前さんを信頼していますから。

《信頼か……》

午後五時に訪問する約束をして電話を切った雅人は、伊豆のときと同じように七海の真意をあれこれ想像し、ホワっとした気分になった。しかし、その温さの底には、則尾と美悠の警告が滓おとしのようにたまり、不穏な冷気を放っている。

《たとえば七海に逢つても、こちらの情報をもらさなけりゃあいだけの話じゃないか》

雅人はそんな強弁で自身の惑いに決着をつけた。

翌日、四時前に仕事を切り上げた雅人は渋谷のデパートでエクスペールのワイングラスセットを買い、七海の部屋に向かった。

「このグラス、専門誌の人気ランキングでも1位になったことがあるんですよ。嬉しいわ。前から欲しかったんです。さっそく使いましょー！」

チェックのエプロンドレス姿で、満面に笑み浮かべた七海は、まるで一線を越えた相手を迎えるような、艶めいた親密さで、雅人をソファアに案内した。スリムシヨートのエプロンドレスから、惜しげもなく晒された生足が、ゾクつとするほどセクシーに感じられる。室内にはビーフシチューのにおいが漂っていた。

「デパートで買った出来合いのものを温めただけですけど、赤ワインに合うんですよ」

小振りの容器にシチューを盛った七海は、前回と同じように雅人とは反対側の端に座り、赤ワインをあけた。

北海道の十勝とがちで開発された新種のカベルネ・ソーヴィニオンを使った五年モノのワインということである。それがどんな価値なのかはわからなかったが、ルビー色の液体を口に含んだ瞬間、のどの奥から頭のなか全体へ、フルーティで芳醇な香り広がった。

「うまい！ ヤケ酒にはもったいないですよ」

「ですからご招待したんです。私一人じゃ、ヤケ酒になってしまおうでしょう？」

乾杯のあと、シチューとワインを交互に味わいながら、城ヶ崎海岸での出来事や、琵琶湖の鯉ヘルペスなどの話で盛り上がった。

七海は仕事の話題にはまったく触れなかった。もちろん意識してのこととは思うが、雅人にはやや窮屈に感じられた。

「それにしても、同じ業界の違う会社の社員がこんな時間を過しているなんて、はたから見れば変でしょうね」

最初のボトルがあいたとき、雅人は酔いに任せて気詰まりな感触にメスを入れた。

「そうですね……」

物憂い表情で応えた七海は、手にしたグラスをクルクルと揺らし、ワインの波紋に目を落としていたが、やがてゆっくりと顔を上げ、雅人を見つめた。

「仕事は仕事、そう割り切れればいいんですけど……大前さんは、どうお感じになりますか？」

「オレですか？ オレは深く考えないようにしています。そりゃあ、仕事ではライバル関係にありますけど、ここで仕事の話をするわけじゃないし、個人として向き合っているつもりですよ」

「そうですね。私も同じです。それに、あんなことがあって、とても不安ですし……大前さんに迷惑をかけているのわかってるんですけど、つい……」

「そんなことありませんよ。オレは自分の意志で関わっているつもりですから」

「ありがとうございます」

七海は潤んだ目に笑みをたたえ、「もう1本あけますね」とワインセラーから新しいワインを取り出した。

心の屈託が和らいだ雅人は、旅行業界を取り巻く経済状況や旅行業界の未来など、最近

感じていることを話した。仕事の領域へも微妙に触れる話題だったが、七海は気にする様子もなく、笑みを交えて自分の考えや思いを語った。

「大前さんと話していると勉強になりますわ」

2本目のボトルが残り少なくなつたころ、七海はソファの背に身をあずけ、放心したように虚空を見つめた。

「勉強になっているのはオレのほうですよ」

「会社ではこんなこと話せる相手はいませんし、なんだかストレスを解消したような気分です……」

「企画室長ともなれば孤独なんですね」

「孤独か……」

七海の表情がゆがみ、薄紅のルージュの口から小さな吐息がもれた。

「私……一人でいると、怖いんです……」

声に嗚咽をにじませ、七海は体を起こした。

「姉がどんな状況にいるかわからないし、最近では私を避けているような気がして……」

そのまま、力の失せた肘を膝に乗せ、両手に顔をうめた。

「竹崎さん、そんなに悩まないでください。今回のことはオレも全力でサポートします」

雅人はブラウンの髪に顔を寄せた。

「お願いします……」

七海が声をしぼり、崩れるようにすがりついてきた。

戸惑いながらその体を抱いたとき、髪の毛と南国の花の芳香が、雅人を怪しい興奮へと誘った。

(2)

週が明けた月曜日、朝一番で手塚部長から内線が入った。

――則尾から紀行文のメールが来たぜ。あいつ、ぎりぎりまで仕上げてきやがった。

さすがにほっとした声である。

――そっちのパソコンに転送しておいたから、すぐに目を通してくれ。俺もざっと読んだけど、まあまああの出来だけ。企画部長や営業部長にも転送しておいたから、夕方にでも検討ミーティングをしよう。則尾にもこっちへ来るように連絡しておくよ！

ガイドブックの原稿チェックなどでは、ライター泣かせの酷評と毒舌で知られた手塚である。それが『まあまあ』と控えめに評価しながらも、やけに機嫌がいい。

送られてきたワード文書に目を通して、その理由が納得できた。『まあまあ』どころか雅人の予想をはるかに超える内容だった。

3つの紀行文は、それぞれ熟年夫婦のドラマ仕立てで展開されている。なかでも雅人が注目したのは北海道の岬をテーマにした紀行文だった。

夫の定年を迎えた夫婦が破局の危機に直面する設定である。夫婦それぞれの思いを抱え、最後になるかもしれないフルムーン旅に出発する。北海道の大地を列車でめぐりながら、それぞれの思いを語るシーンがある。そしてシーンとシーンをつなぐ沿線風景の描写や訪れる岬・街の描写、そこには北の大地の風情や、そこに暮す人々の素朴な逞しさなどが、さりげなく織りまぜてある。都会という便利で冷たい生活空間のなかで、長年かけて凝り

固まった相手への不満は、いつしか大自然の土に向き合う開拓者の心へと昇華され、まるで若いカッブルように初々しい情熱と夢をもって人生の第2ステージへ踏み出す……そんなストーリーである。

また天孫降臨てんそんこうりんの謎を探る九州の旅では、古代史の深部に鋭く触れながら夫婦が互いに己の幼少から今までの歴史を語り合い、改めて人生の機微を心に深く感じるというストーリーであり、日本3大名瀑をめぐる旅は、厳しい経済情勢や企業経営に疲れ、心を病んだ夫を妻が旅に誘うという設定であり、マイナスイオンがあふれる大自然の大气のなかで妻が夫に語りかけ、心の闇に光を灯すという展開である。

どのプランの紀行文にも、ひょうひょうとした則尾からは想像もできない深い夫婦愛や人生の温もりがあふれている。現代の熟年夫婦にありがちな状況設定も見事だが、旅の情景描写や飽きさせない会話の口調、心の動き、そして、なによりも旅の終わりには澁刺しぶさとした鋭気を獲得する結末が、ある種のカタルシスを誘い、極上の短編小説に触れたような読後感さえある。この紀行文を目にしたら多くの熟年夫婦が旅心を刺激されると期待できる出来栄えだった。

《やるじゃん！》

則尾の感性と力量に、雅人は素直に拍手をおくり、課内のスタッフに声をかけた。

「おおい、ちょっと注目してくれ。今回のプランの紀行文が上がった。全員にメールするから読んでみてくれ。それと夕方に企画会議があるから、それまでに感想を聞かせてくれ」
「え〜！ 夕方までですか？」

パソコンと格闘していた美悠が振り返る。

「夕方に会議があるから、その前には感想をもらいたいんだ」

雅人のリクエストに、「俺、今日は支店まわりっすよ」「ちょっと手が離せないんですけど」などと勝手な声があがる。

「余裕があるやつだけでいいよ」

雅人がふてくされていうと、すぐ前の席の美悠がにんまりと笑んだ。

「課長、私は大丈夫ですよ。則尾さんの文章をビシバシ批評しますからね」

「いいさ、ガンガンやってくれ」

そう応えたものの、美悠から辛辣に責められる則尾を想像し、ちょっと哀れな気がした。

昼食後、雅人はパソコンにワード文書で保存してある紀行文を立上げな、手はじめに北海道の紀行文の校正に取りかかった。

文章を読み進めるうちに、則尾と行った下見の情景が脳裏に浮かんでくる。紀行文の最後は北斗星での帰京の描写で締めくくられていた。

寝台特急の情景を思い描いていると、ふいにカシオペアのイメージが重なった。すると、陳ミラー淑美のすらっとした容姿と、彼女のダイニングメッセージが浮かぶ。その情景は次第に、はじめて七海と逢ったオンネットーへと移っていった。

キーボードの手がとまる。

《あのと七海はまだ遠い存在だった》

七海の匂いがリアルによみがえり、充足感と後悔が交錯した甘酸っぱい感情が心を満たした。この感情はあの夜以来ずっと雅人の心に住み着いている。

土曜の夜、雅人は七海と唇を重ねた。しかし踏み込んだのはそこまでだった。七海から拒絶されたのではなく、雅人が踏みとどまったのである。

七海への微かな不信感やビジネスの倫理を犯すという罪意識、それらも歯止めのひとつではあったが、それよりも、雅人自身の怖気おそけのような心情が最大のブレーキだった。《どうしてだろう？》

雅人にも欲情を自制した己の正気が解せなかった。

独身に戻ってからの二年間、その場限りの出逢いや擬似恋愛のようなものは何度かあったが、そのときには感じなかった冷ややかな正気である。

《やっぱり一度失敗しているせいかなあ》

意識に潜在する結婚生活への恐れと憧れ、そのふたつの隔たりを埋められない自分を改めて思い知らされたような気がする。

口づけのあと、雅人は七海をソファに座らせた。そして彼女の不安を癒そうと、割烹料理店で聞いた事件の構図をそれとなく話した。もちろん七海や由布子を事件とは関わりない立場におき、長嶺らの企みをぼやかしながら語り、それに立ち向かう自分の意志を強調した。

別れぎわ、少女のような羞恥を浮かべた七海は、自ら雅人の唇に顔を寄せた。

ドアを閉め、鴉羽色トビイロを忍ばせる渋谷の空を仰いだとき、充足感と後悔を混ぜ合わせたような甘酸っぱい感情が雅人の心に忍び寄った。

《彼女は今回の事件とは無関係だ》

土曜の夜のことを考えていると、そんな思いが広がる。しかし、その夢想にはいくつもの障壁が立ちはだかっている。

雅人はパソコン画面を呆然と見ながら『シノウミ』の文字を打った。

紀行文の文字を押し退け、死の海、篠海、滋野海などの変換文字が次々と表示される。

《違うんだよなあ》

一度打った文字を消し、再びシノウミと打ち直し、変換キーを押す。新たな変換文字が表示された瞬間、雅人は愕然とした。

《え?! どういうこと?》

雅人はキーボードを打ち直し、その理由を確認した。

《もしかしたら……》

慌てて紀行文のワードを閉じる。そしてインターネット・エクスプローラを立上げ、四季観光産業のホームページを検索した。

《まさか……》

現われたトップ画面のフラッシュが、雅人の意識を吸い寄せた。

ゴージャスなホテルの写真にかぶさり、『ここに来て、極上の時を知る。新近江グランドリゾート』の文字が、画面の左から右へとゆっくり流れていた。

ローマ字入力で『ん』の文字にする場合、Nのキーを2回打って変換する。雅人もそうであるが、ローマ字入力を常用していると、無意識にダブルらせて打つ癖がついてしまう。雅人が二度目にローマ字入力したとき、いつもの癖でNをダブルさせ『shinnoumi』を『shinnoumi』と打ってしまったのである。

変換された和文は『新近江』だった。そして、そのワードは四季観光産業が展開する新たなホテルブランド名とオーバーラップしていた。

《単なる打ちミスだしなあ》

最初の興奮が冷めるに従い、疑心が頭をもたげる。

そのとき、ふいに高校時代の同級生の顔が浮かんだ。『健一』という名のニキビ面^{にきびづら}である。その級友が『俺の名前さ、ローマ字で書くとケニチって読みになっちゃうんだ』とぼやいていたのを思い出したのである。

《そうか、ローマ字表記の『ん』はN一文字なんだ!》

雅人は四季観光産業のホームページにある『新近江グランドリゾート』のコンテンツボタンをクリックした。

新近江グランドリゾートは、四季観光産業が展開する近江グランドホテルより、ワンランク上に位置する新バージョンのホテルブランドである。二〇〇三年、神戸市に第一号を竣工して以来、年に2〜3棟のペースで開業し、現在では全国の主要都市近郊およびリゾート地の十七カ所に展開している。宿泊料金は通常のシティホテルよりはるかに高額で、利用方法は一週間から一カ月までの長期滞在プランが軸になっている。

このホテルの狙いは旅行者の宿泊ではなく、セレブと呼ばれる層の人々が心身のリフレッシュ目的で利用することにあるらしい。宿泊料はかなり高額だが、施設内には人間ドック用の医院や心療内科をはじめ、鍼灸院、カイロプラクティクス、さらには本格的なフィットネスジム、全身美容のサロン、サウナ、スパ、岩盤浴施設など、心身の健康や美容に関する施設が揃っている。また、和洋中とそれぞれが特色をこらしたレストランでは、宿泊客個々への栄養相談にもとづいた料理が饗される。プライベートー保護やセキュリティ面も完璧で、ロビー以外のあらゆる場所が宿泊者以外にはオフリミットになっている。

ホテルの概要を見た雅人は美悠に声をかけた。

「ミュウちゃん忙しい?」

「えっ?」と振り向いた美悠は、

「暇なわけではないですよ。紀行文をチェックしてるところですから」

「そうか、忙しいか……」

「なんですか?」

「四季観光産業の新近江グランドリゾートって、知ってるかなって思ってたさ」

「急にどうしたんですか?」

椅子から立った美悠は、訝しげな表情で雅人のデスクの脇に来た。

「この画面なんですけど、さつきシノウミって打ったら新近江という文字に変換されたんだ。ローマ字のエヌをダブって打ったんだけど、なにか意味があるのかなと思って」

パソコン画面をのぞいた美悠は「あっ!」と目を開いた。

「課長、これすごい発見ですよ!」

「そうかなあ」

「単なるケガの功名かもしれませんけど」

「バカにしてるの?」

「バカになんかしてませんよ。だってカシオペ……」

いいかけた美悠は、おずおずと課内を見まわし、声を潜めた。

「被害者はアメリカ国籍でしょう？ もし被害者がメモのようなものでダイニング……」
再び言葉をとめた美悠は、デスクのメモ用紙をとって『shin oumi』と書いた。
「ローマ字式に書けばこんな感じだと思っんです。でも、メモだけで読めば、つまり……
その……」

「あのメッセージになるってことだろうか？」

「その可能性はありますよ……私、このホテルブランド、聞いたことあります。でも一般
宿泊用じゃないから私たちの手配外で、先方からの登録もなかったはずですけど」

「そうだろうな、オレも知らなかったからな」

「あのメッセージがこのブランドのことだとしたら、新近江に來いっていう意味ですよ
背後から美悠の手がマウスに伸び、『所在一覽』のコンテンツをクリックした。

「こんなにたくさんあるんですか！」

表示された全国地図の所在一覽を見て、美悠が顔をしかめた。

「オレもさっき見たんだけどね、全国十七カ所の展開だよ。だから『來い』っていわれて
もポイントが曖昧なんだ」

「そうですねえ」

美悠は神妙に画面を見つめたが、すぐに「そっかあ！」となにかに気づいた。

「あの事件は上りのカシオペアですから、北海道の小樽のホテルは除外してもいいんじや
ないかしら。それと大阪以西も除外対象かな。そこだったら飛行機を使うと思っんだけど」

「でも、あの女性は豪華寝台特急のカシオペアに乗りたかったのかも知れないよ」

「そんな悠長な局面じゃないと思っますけど」

「でも、首都圏だつて飛行機のほうが早いぜ」

「だから東京駅から簡単な乗換えで行ける所ですよ。もし東京近郊の地理に詳しくない人
だったら、羽田から乗り継ぐより東京駅で乗換えたほうがわかりやすいでしょう？ それ
ならカシオペアに乗るメリットもあると思っただけど」

「そうかなあ」

たしかに『新近江』は四季観光産業の固有ブランド名に冠されている。しかし施設は全
国十七カ所におよんでいるし、関東やその近郊だけでも神奈川、千葉、山梨、静岡、長野
の各県にあるため、『來い』のポイントが曖昧である。

「課長、新近江グランドリゾートになにかの謎があるんでしようか？」

「オレにもわからないよ。夕方のミーティングに則尾さんが来るから、終わったら話して
みようと思ってるんだけどね」

「則尾さんのケガはどうなんですか？」

「ギブスをはめた状態だけど大丈夫のようだ」

「課長、私も一緒に話を聞いていいですか？」

「ミュウちゃんが？」

「だめですか？」

「だめってことはないけど……」

「だったらミーティングが終わったら教えてください。それから紀行文ですけど、登場す
る奥さんのたちの言葉づかいや心情表現がちょっと理想的で堅い感じですね。私だつたら
もっとさりげない言葉を使うけどな」

「じゃあ箇条書きでもいいから感じたままをワードで書いてくれ」

素晴らしいながら、雅人は、新近江グランドリゾートの所在一覽が示された画面をプリントアウトした。

ホテル所在一覽を見た則尾は考え込んでしまった。つい先ほどまでの悦に入った表情が嘘のように、情けない面持ちである。

夕方からのミーティングで紀行文は絶賛された。手塚部長は文中に使用する風景写真をあれこれ考えはじめる始末で、営業部長も昂然と「このストーリーならT V局に再交渉できる」と息まいた。札幌の事件で急降下した則尾の面目は、躍如どころか以前より格があがったようである。則尾は照れながらも、御輿みこしに乗った成金長者のようにご満悦だったが、ミーティングを終え、外のコーヒー専門店でローマ字のアナグラムを聞いた瞬間から悩める中年になってしまった。

則尾が腕を組んで考え込んだとき、店の入り口に美悠の姿が現われた。彼女はカウンターで飲み物を受け取り、奥の席に陣取った雅人と則尾に歩み寄った。

「則尾さん、お久しぶりです！」

美悠の姿を見たとたん、悩める中年は照れる中年へと豹変した。

「やあミュウちゃん、久しぶりだね」

「札幌では大変でしたね」

「心配かけちゃったけど、なんとか生きてるよ」

美悠は則尾のギブス姿をまじまじと見た。

「ケガは本当に大丈夫なんですか？」

「たいしたことないさ。でもミュウちゃんの顔が見られなかったから心が痛んでさあ」

照れる中年は次第にスケベな中年へと変身する。

「またあ、そんなこといってえ」

「本当さ。先週も大前くんからミュウちゃんの推理の話聞いたけど、懐かしかったよ」

「あら課長、あのことを話したんですか」

美悠は非難をにじませた視線を雅人に投げかけた。

「話したといっても、ざっとだよ……」

雅人の気まずい心情を察つた則尾は「そうそう、ざっとだよ」とフォローし、

「でも、あの推理は鋭いよ」

雅人の隣に腰をおろした美悠は、ちよつと恥ずかしそうに笑んだ。

「でも現実離れしていて自分でも笑っちゃうくらい」

「だからすごいんだよ。普通の人はあんな飛躍した推理はできない。C I AやF B Iまで考えるなんて、すごいとしかいいようがない」

「私、大学のゼミのテーマがハリウッド映画の世界戦略だったんです。そのときに、アメリカの政策や暗部のことも調べましたから、すぐに思いついんです」

「だとしてもすごい。大前くん、こんな優秀な人材を旅行業界なんかに縛りつけておいてやいけないよ。福田がブレインに欲しいっていつてたから紹介するか？」

その言葉に、美悠は怪訝な表情を浮かべた。

「福田って誰ですか？」

「いやいやこつちのこと」

則尾の逃げを「まあいっつかあ」と軽くいなした美悠は、急に真顔に戻り、

「ところで則尾さん、紀行文を読ませていただきましたよ」

「あ！ ミーティングのとき大前くんが提出したスタッフの感想って、ミュウちゃんの感想だろうか？ ほら、女房のセリフが堅いとか心情がこじつけがましいとかさ」

「あたりい！」

「やっぱりそうか。あの批評は女性の感性だよな。でもFT課にはミュウちゃん以外にあそこまで読めるスタッフはいそうもないしね。なあ大前課長、そうだろうか？」

雅人は則尾の脱線を見無視し、

「則尾さん、そんなことより新近江のほうは？」

「そうそう問題はこれだよな」

再び所在地図の紙に目を落とした則尾は、

「あのダイニングメッセージが新近江だと仮定しても、場所の特定がなあ。ミュウちゃんはどう思う？」

「私は東京駅から簡単な乗換えで行ける所だと思うんですけど」

「なるほど、その線も考えられるな。来いか……命令形の動詞だよなあ。でも本当に動詞なのかな。大前くんはどう思う？」

則尾は目をしかめて雅人を見た。

「動詞じゃないとしたらなんですか？」

「わからないから聞いているんだよ」

「オレにだってわかりませんよ」

そのときコーヒーを口に運びかけた美悠が「そうだ！」と目を輝かせた。

「課長、上野分駐所で最初にこのメッセージを聞いたとき、カシオペアの車掌が聞いたのは、たしか『しのうみ』と『こい』っていう2つの言葉でしたよね？」

「そうだったかな」

「たしかそうだったと思うんだけど……もし単独の言葉だとした、『こい』は必ずしも命令形動詞の『来い』とは限らないですよね」

「それじゃあ琵琶湖のコイのことかなあ」

「課長、琵琶湖のコイってなんですか？」

「則尾さんと北海道を下見しているときに発見したんだけどね……」

雅人は篠海の春椿堂や灯明台のアナグラムと、琵琶湖のコイヘルペスのことを簡単に説明した。

「なんだ、いろいろ考えていたんですね。それで城ヶ崎海岸の篠海はどうなんですか？」
すると則尾が「あれ？」と意外そうに目を開いた。

「ミュウちゃん知らなかったの？ 大前くんは先々週の土曜日に伊豆の現地へ行ってきたんだぜ。しかもSTBの企画室長と一緒にさあ」

《則尾さん！ そのことは……》

しかし遅かった。美悠は思いつめたように雅人を凝視した。

「竹崎先輩とですか？」

雅人は腹をくくった。

「竹崎さんも例のダイイングメッセージのことを気にしていたし、それに札幌でお姉さんがあんなことになってさ、事件の解明に必死だったんだよ」

「そうですか……竹崎先輩ならそうするでしょうね。それで、なにかわかったんですか？」

「いやわからない。現地には上野分駐所で会った警部も張り込みをしていた」

「じゃあ警察もダイイングメッセージのアナグラムに気づいていたんですね」

「だと思っ。でもなんの成果もないようだった」

「課長ったら……竹崎先輩とは話してないっていつてたじゃないですか」

「ミュウちゃんに心配かけたくなかったからさあ」

「まあ、いいんですけど……」

気まずい空気が流れる。それを察知した則尾が慌てて助け舟を出した。

「まあまあ、その件はおいといてだ、コイって言葉が命令形の動詞じゃないとしたら、あとは名詞としか考えられないな」

それに救われた雅人は「そうですね」と大きめに相槌を打ち、

「名詞だとしたらコイは池の鯉っていうことになりませよね。それ以外だと……恋するの『恋』でもピンとこないし、人の名前や地名にしても変だし……あの女性はアメリカ人のようだから、英語と仮定したって、コイなんて発音する言葉があるのかな？」

雅人はおずおずと美悠を見た。しかし彼女は鼻筋にシワを寄せ、テーブルのあたりを見つめていた。その表情は怒っているでもなく、しよげているでもない。

「どうしたの？」

雅人は恐る恐る声をかけた。

「ちょっと待ってください」

にべもなく拒絶した美悠は、ふた呼吸ぐらいおいてから、弾かれたように顔を上げた。

「彼女、中国系の米国人でしたよね？」

どちらにともなく確認し、「だとしたら……」と記憶を探るように虚空を見つめ、

「学生時代に中国語専攻の友人から聞いたんですけど、日本語と中国語は有気音と無気音に大きな違いがあつて、中国語を特訓していると日本語の濁音の発音ができなくなるってことです。つまり中国語の子音は有気音と無気音が対たいになっていて、それが日本語の清音と濁音の組み合わせと一緒らしいんです。言語学的には、もともと日本語には濁音がなかったけど、中国語の有気音と無気音の組み合わせを正確に分類し、中国人とコミュニケーションを図るために濁音を使用するようになったということですけど……」

「わかります？」

「残念！ われわれの知識じゃ、追いつきそうもない」

戯けた口調で応えた則尾を見て、彼女は苦笑した。

「まあ、こんな前口上はどうでもいいんですけど、つまりは、日本語がちょっとできる中国人の言葉の特徴っていうのかな、それで、コイって言葉の音便変化を考えると……」
すかさず則尾が反応した。

「そうか！ カ行の濁音か！」

「ええ」

「ってことはメッセージの『コイ』は、『ゴイ』の清音発音ってことだな」

「その可能性もあるってことです」

「ゴイか……」

つぶやいた瞬間、則尾は「あっ！」と声を発し、所在一覽の紙を雅人の目前に示した。
「あるぜ！ ほら！」

則尾が指したのは、千葉県「いちばな」の東京湾岸にある『市原 新近江ランドリゾート』だった。
「これって市原市の施設じゃないですか、それがどうして……」

しかし次の瞬間、雅人の視界が一気にひらけた。

「そうか！ 五井か！」

「そういうことだよ」

則尾は足もとのバッグからノートパソコンを取り出し、電源を入れた。

「市原市を通っている電車の路線には、市原という駅名がないんだ」

インターネットに接続し、地図を検索する。全国から県へ、そして市部へと地図を絞込み、現われた市原市の地図画面を雅人と美悠に示した。

「ほら、JR内房線の市原市の中心街に一番近い駅は五井駅だ。五井駅は、房総半島の内陸部へ延びる小湊鉄道「のびるこみなと」の基点駅でもある。それに……」

則尾はYahooの検索画面に戻し、市原・新近江ランドリゾートと打ち込んだ。

「やっぱりそうだ。施設の住所も市原市五井だよ」

「五井駅だったら東京駅から京葉線一本でアプローチできる電車もありますし、乗換えにしたって千葉市の蘇我駅「そが」で一回だけですからね」

雅人が勇んでいうと、美悠が口を尖らせた。

「課長、それは私がいったことじゃないですか……まあ許してあげますよ。でも五井のホテルに、なにかがあるってことなんでしょう？」

「もしかして偽装誘拐の……」

雅人がいいかけたとき、則尾がテーブルの下で靴を蹴った。ギクっとして則尾を見ると、彼は目を細めて小さく首を振った。

「ちよつと、どうしたんですか？ 課長、偽装誘拐ってなんですか？」

美悠は二人の素振りに気づき、食いさがつた。

「いや、それはだね……言葉のアヤで……」

「二人とも、なにか隠しているでしょう」

美悠はいたずらっ子を叱る母親のように二人を凝視した。

「やっぱりだめかあ」

則尾の表情がくずれた。

「ミユウちゃんは鋭いからなあ、もう隠せないよ」

観念したようにつぶやき、「聞きたい？」と思わせぶりな目を美悠に向けた。

「ええ、もちろん聞きたいです」

「でも、ここじゃあまずいな。FT課にはまだ人が残ってる？」

「もう誰もいないと思いますけど、もし誰か残っていたらミーティングルームを使えばいいですよ。この時間なら誰も使っていないはずだから」

「それじゃあ、とりあえず会社に戻って話そう」

則尾はパソコンをバッグにしまいはじめた。

「それじゃあ、竹崎先輩が関係しているかもしれないんですか!？」

則尾の話が終わったとき、ガランとしたF T課の室内に美悠の声が響き渡った。

「いや、まだ可能性っていうレベルだよ」

則尾は眉をハの字にし、美悠の勇み足を牽制した。

「でも、札幌の事件までが偽装だとしたら、S T Bの社長も承知しているってことでしょ? だったら竹崎先輩だって……」

「でも、このことはボクらの想像でしかないんだから、決めつけるのはまだ早いよ」

「そんなこといったって……」

「ミュちゃん、そんなに心配しなくても大丈夫だよ。仮にボクらの想像が当たっていたとしても、竹崎さんが関係しているとは限らないだし」

則尾が美悠を慰めたとき、彼の携帯電話が鳴った。慌てて携帯電話に出た則尾は、うんと数回うなずき、「今一緒にいるから聞いてみるよ」と雅人を振り返った。

「福田からだけど、あいつもなにかつかんだことがあるらしくて、これから事務所へ来ないかっていうんだけど、どう?」

「いいですよ」

雅人が了解すると、則尾は再び携帯電話に向かって、

「OKだ。それと、こっちもすごい発見があったから、その報告もするよ。それじゃあ」
電話を切った則尾に、美悠が怪訝な目を向けた。

「これからどこかへ行くんですか?」

「うん、さっき話に出た福田ってやつだけど、そいつのところへ行くんだ。夕飯を食べながら話そうって誘いだよ」

「場所はどこなんですか?」

「錦糸町だけ」

「私も一緒に行っていますか?」

これには雅人も肝を冷やした。

「ミュウちゃん、そりやまずいよ」

「あら、私が一緒じゃ、だめなんですか?」

「当前さ。ミュウちゃんを危険なことに引き込むわけにはいかないからね」

「でも五井に気づいたのは私のサポートがあつたからでしょう? 私だって話を聞く権利があると思いますけど」

「権利の問題じゃないよ」

「じゃあ、さつき則尾さんがいったように、福田って人のブレーンに立候補します」

「ミュウちゃん」

雅人が慥然と顔をしかめたとき、則尾がふっと吹き出した。

「こりゃあミュウちゃんに歩があるな。大前課長、諦めたら?」

「でも彼女の家は横浜ですよ。これからだ遅くなるでしょう?」

「まだ九時前だよ。もし終電に間に合わなかったら大前くんの部屋に泊めてやれば?」

「則尾さん、勘弁してくださいよ!」

「大前くんがだめならボクの部屋でもいいんだぜ、2LDKだから部屋が余っているし」
冗談とも本気ともつかない調子で則尾が美悠の反応をうかがう。

「二人ともなにいつてるんですか。それぐらい計算して帰りますからご心配なく」

美悠はスケベ中年の目論見を呆気なく粉碎した。則尾は「そりゃあ残念」とおどけてみせ、携帯電話で福田に美悠と一緒に行く旨を伝えた。

前回と同じ割烹料理店の個室を用意して待っていた福田は、二人のあとから部屋に入った美悠を見て、「おー」と表情を輝かせた。

「さっき電話で話した大前くんの部下で、例のミュウちゃん。本名は美悠さんだっけ？」

則尾の紹介に、美悠は「結城と申します」と神妙に頭を下げた。

「なるほど、うわさどおりキュートな女性だな」

福田の反応に、美悠は口をとがらせ、雅人の腕を小突いた。

「課長、どんなうわさをしてたんですか？」

「うわさじゃなくて、ミュウちゃんの推理の内容を話しただけさ」

「ははは、そんなところだ」

苦笑いでその場を繕った福田は、三人を席へ座るよう促した。そして用意されていた瓶ビールを手にし、「まずはゲストからだ」と美悠に差し出した。

「料理は適当に頼んでおいたが、それでいいかな？」

その言葉が終わらないうちに襖が開き、料理が運ばれてきた。

「まずは則尾の発見っていうのを聞かせてくれないか？」

ビールで乾杯したあと、福田は口の泡を拭いながら聞いた。

「発見したのはボクじゃなくて大前くん。まさに大手柄だよ」

そう前置きした則尾はバッグからメモ帳を出して『Shinomi』と書いた。

「例のシノウミっていうダイニングメッセージなんだけど、これまで城ヶ崎海岸の篠海とか日本語のアナグラムをいろいろ考えてみたけど、ピンとくるものがなかった。ところが大前くんが、ローマ字読みのアナグラムという可能性を発見したんだ。つまりシノウミをローマ字で表記し、ノというつづりのエヌとオーを分けて全体を読むと『新近江』になるんだ。このアナグラムから想像するに、ガイシャはダイニングメッセージの言葉をメモのような英文字情報で渡されたということになる」

「なるほど、それでこのローマ字をシノウミと読んだってわけだな。新近江か……で、これがどう重要なんだ？」

「新近江というのは四季観光産業のホテルブランドの名前にあるのさ。正確にいうと新近江ランドリゾートっていうブランドだ。それで四季観光産業の新近江ランドリゾートの所在地を調べたら、全国に十七カ所あり、そのうちカシオペアが着く東京駅から簡単な乗換えで行ける関東圏だけでも五カ所あることがわかった」

則尾はバッグからホテル所在一覧のプリントアウトを出し、福田の前に置いた。

「つまりポイントが絞れないってことだな」

「ところがわかったんだよ」

則尾はにんまりと福田を見た。

「ここからはミュウちゃんの着想だ。場所の秘密はシノウミに続く『ユイ』という言葉に

あった。ミュウちゃんはこのダイイングメッセージを残した女性が中国系米国人ということに着目し、日本語の濁音発音が中国系の発音では清音になるっていう事実気づいた。つまり、『来い』という発音は『ゴイ』の清音っていう可能性があるってことだ」

「ゴイ？」

福田は怪訝な表情で所在一覽を見つめた。

「わからないか？」

則尾が焦らすように声をかけたとき、「そうか」と福田が顔をあげた。

「千葉県の上原市にあるやつだな」

「ザツツライト。市原の上井だよ。ホテルの所在地を調べたら住所は市原市上井だった。最寄りの駅名も上井だ」

「よく見つけたなあ。さすがにミュウちゃんだ」

福田はわざとらしく美悠を褒め、「カシオペアの車内からローマ字表記のメモは発見されているのかな？」と美悠に話を向けた。いきなり問われた美悠は、飲みかけたビールを慌ててテーブルに戻した。

「鉄道警察隊ではそのことに関しては何にも聞いていませんでした。だからこのダイイングメッセージは車掌さんが聞いた言葉ということでしたけど」

「ということは犯人が持ち去ったってことか」

一瞬、虚空を見据えた福田は、納得するように「うん」とうなずいた。

「則尾、これは重要な符丁だぜ。上井といえば、北条エナジの姉ヶ崎精製所にも近い」
「なるほど、北条エナジとの連携にも便利ってわけだ」

「身を隠す以前から、そこで秘密の会合などを行っていた可能性もあるな」

「CIAは偽装誘拐や長嶺の潜伏場所として気づいたってことか？」

「そう考えるより他はない」

「それなら、カシオペアの要員が殺害されたあと、どうしてなんのアクションもないんだ？」

「そのことなんだが……」

福田はチラッと美悠を見て、ためらいを浮かべた。

「私が聞いたら、まずい話なんでしょうか？」

美悠がおずおずと聞く。

「まずいという訳じゃあないが……」

一瞬、美悠を見た福田は、「まあ、話してもいいか」と自答するようにつぶやき、則尾に向き直った。

「実はオコタンペ湖で殺された男のことだが、もしそれがCIAの要員だとしたら、カシオペア車内で殺された同じCIAの女性要員にメモを渡した後に殺されたと仮定できる。つまり、携帯電話などで連絡したら傍受される恐れもあるから、重要なことはメモで直接渡したと考えるほうが合理的だ。しかしメモを受け取った要員も、結局は消されてしまった。そのため連絡網が絶たれたのと、マンパワーが追いつかなくなった可能性もある」

「なるほどね……」

小さくうなずいた則尾は、

「今回のことで来日したCIA要員はどれくらいいるのかな？」

「せいぜい三、四人だ」

「そんなに少ないのか……」

腕組みをした則尾は、ふと顔を上げ、怪訝な目で福田を凝視した。

「でもさ、福田はどうしてそんなことまでわかるの？」

狼狽を浮かべた福田は、

「いや、単なる想像だが……米国が単一事件に投入できる要員数はそれぐらいだから」

則尾は解せないといった面持ちでフーンと鼻息を吐いたが、すぐに「まあ、そんなもんだろうな」と独り合点し、いつものひょうひょうとした表情に戻った。

「ところで福田は、市原のホテルの件、どうするつもり？」

「まずは事実確認だ。新近江のアナグラム分析が正しいとは限らないからな」

「現地に行くのか？」

「監視ぐらいはしてみようと思う」

「ボクも行こうか？」

「いや、まずは俺一人で行くよ。場合によっては危険だからな。それに二人だと目立つ。だから最初は俺一人で行く」

「わかった。確認の件は福田に一任しよう。大前くんたちもそれでいい？」

則尾は雅人と美悠に確認すると再び福田に向き直った。

「それじゃあ次は福田がつかんだこと聞かせてくれないか」

「そんなに焦るなよ。料理を食いながら話すから」

則尾をたしなめた福田は、「さあ、結城さんも遠慮しないでやってください」と美悠にビールを差し出した。

福田がつかんだ情報とは、長嶺、北条、亀山、白石の関係だった。

この四者のつながりの糸をたぐった福田は、大学時代の四人が、当時、社会的な現象だった学生運動で同じセクトに所属する精鋭闘士だったことを突きとめたのである。

「四人とも一九七〇年前後に過激な活動をしていた京浜安保共闘という一派の学生闘士だ。彼らの仲間には、その後、連合赤軍を組織した連中もいたってことだが、少なくとも彼ら四人は学生運動から手を引き、それぞれの道へ進んだようだ。しかし彼らの考えかたは変わっていないかった。それぞれが社会の第一線に立ったとき、再び革命に乗り出した、とまあ、こんな構図かな」

神妙な顔で聞いていた則尾は「なるほど」と合点し、

「それぞれが経済力や政治力を手にし、本格的な日本の革命を画策したってことだな」

「その思想的な軸になったのが、長嶺善季の『ドラッカーの限界』だったという筋書きだ」

「でも福田、そう仮定すると矛盾があるんじゃないか？ 亀山と白石は政治や官庁の人間だし、もともと親ロシア派として、ロシアと日本の関係を重視していたんだろう？」

「たしかに二人とも親ロシア派といわれているが、正しくは親ソビエト派だよ。ソビエト連邦が崩壊する以前、亀山議員はソビエト寄りの考えかたをしていた……というより保守議員なのに、ソビエトとの関係を重視していたってことだ」

「でも亀山は政務次官にまでなった当時の与党議員だぜ」

「与党だから親米とは限らないよ。ただし亀山の本意はソビエトとの結託ではなく、北海

道の建て直しにあつたようだ。北方四島などの問題はとりあえず棚上げしても、ソビエトとの経済的な協力体制を築かない限り、北海道の経済疲弊は救えないと考えていたようだ」

「それなのにソビエト崩壊後は中国寄りの政策へシフトしたってことか？」

「シフトしたというより、長嶺の東アジア政経連合構想に乗ったというべきだろうな。ソビエトからロシアに変わってから、あの国の経済はマフィアが握るようになった。そんな背景もあつて、亀山や白石は親ソビエト政策を転換せざるを得なくなった。そこへ登場したのが、かつての革命闘士仲間の東アジア政経連合構想だ。その萌芽が北海道ということを考えれば、亀山や白石は、北嶺観光開発への土地融通などにも尽力したんだろうな」

「ということは、M A フアンドへのトラップを仕掛ける政治的なバックアップをしたのは、やっぱり彼らだったってことか？」

「そう考えるのが妥当だ。M A フアンド側にしても、日本政府や省庁の政治的な口利きがなければ一十億なんて途方もないフアンドは組めなかったはずだ」

「ちよつと待てよ、そうなる北嶺資源開発の東シベリア油田からのパイプ輸送ルートにも亀山と白石が絡んでたってことか？」

「亀山と白石にとって重要だったのは、東シベリアの油が北海道で精製されるってことだ。東アジア政経連合構想なら中国經由の大慶ラインたいけいでも中国を通らないナホトカラインでも、どちらでもいいってことになる。要は北海道で精製され、それが日本国内や政経連合の国々へ輸出されるってこと重要だ。かつての親ソビエト政策よりも先々の発展性がある」

「それじゃあアメリカは面白くないよなあ」

「ああ、当然C I A が動く。報道発表では、亀山は自殺、白石は事故とされているが、亀山議員は行方不明になる前日の夜、地元後援会との会合に出席し、北海道で開発されたワインの新種にご満悦だったそうだ。その会合には元官僚の白石も出席していて、北海道の未来構想を華々しくぶちあげたらしい。それなのに翌日には二人揃ってホテルを出たまま行方不明になり、オンネット^①で自殺なんてありえない」

「ちよつと待てよ。そりゃあ報道に官憲の意図が入ったってことじゃないか？ ボクも道警の発表は変だと思っていたけど……それって初動捜査が甘いつてことじゃなくて、公安関係が動いているってことだろう？」

「ああ、バリバリ動いている。その動きも、C I A の活動を擁護しているふしがある」

「それであんな発表になったってわけか。なるほど読めてきたぞ」

福田は得心する則尾を見てニヤつと笑んだ。

「つまりは、C I A だけじゃなくて、日本の公安の動きから逃れるために、長嶺は身を隠したってことだな。それも誘拐を偽装してだ」

美悠は呆気にとられて二人のやりとりを聞いていたが、雅人の脳裏には、福田の言葉が暗く冷たい影となって忍び込んでいた。

《あの夜、七海の部屋で飲んだワインは十勝産だった……》

ルビー色の液体が亀山議員と長嶺会長を結ぶ血脈に感じられた。その血流は七海を同じ色に染めている。

雅人はどうすることもできない焦慮に喘ぎながら、七海の部屋で飲んだワインの芳香を呪った。